

特集：図書館総合展 第18回図書館総合展 フォーラム報告

「出版文化を支える ～図書館・書店・出版社～」

(11月9日実施)

今年度は昨年度に引き続き出版文化をテーマとしたが、議論を発展させ、出版文化を支えるために何ができるか、図書館の新たな可能性を提言する会とし、元塩尻市立図書館長の内野安彦氏と、原書房社長の成瀬雅人氏に対談をお願いした。

まず内野氏から、図書館の課題として「認知度が低い」という点が挙げられた。図書館を知らない市民が多いということは、議会で重要視されず、予算減額に繋がる。認知度向上に努めることが、予算増額の糸口になり得るのではないか。また、認知度が低い理由として、地域に出向かない、名刺を持ち歩かない等、図書館員特有の文化があると指摘。図書館員は地域に出向き、市民がより多くの本に触れられるよう努めるべきと述べた。

その事例として、内野氏が館長を勤めた塩尻市立図書館の開館準備の様子を紹介した。周辺地域の書店・古書店・図書館等を訪問し、書棚を分析。地域に不足している資料を選書するように努めたという。その際、貸出数は考慮せず、多品種の資料を市民に届けることを意識した。また、全国的に有名な取組「本の寺子屋」にも触れ、地域の書店と図書館の協力が重要である、と述べた。

選書について成瀬氏は、「地方の書店には専門書が配本されない。図書館がキーステーションとなって、市民に本が行き届くようにしてほしい」

と、出版社からの希望を述べた。内野氏も、「近年の図書館の書棚は、書店に似てきている。市民アンケートでは、図書館に来ない理由として『読みたい本がない』という声が多い。出版文化を考えた選書をすれば、少数の本が全国に行き届くと信じている」と述べた。

成瀬氏からは、出版文化を支えるための動きを図書館が積極的に行っていない面について「何故なのか」という問いかけがあった。そして、小予算で実施展開している山梨県の例を示し、様々な工夫で取り組んでほしいという要望が語られた。

最後に内野氏が「今までと同じことをしては予算がつかない。出版文化を守る最大の力は市民の力。市民に支えてもらえる図書館になるよう、アクションを起こすべきだ」とまとめ、その具体例として、1月に行われる「出版文化を支えるイベント『金原瑞人 本のワクワク』」が紹介された。

当日は昨年度を超える入場者があった。アンケートでは、「出版文化を守るべき意義を具体的に知ることができた」というだけでなく、「新しい視点をもたらした」「少しずつでも何かアクションを起こします」「図書館だからこそ出来ることをよりつきつめ、実践を図りたい」といった「次」を感じさせてくれる前向きな記載も寄せられた。

(綾瀬市立図書館 百瀬 茉莉奈)

特集：図書館総合展 第18回図書館総合展 ブース展示報告

(11月8～10日実施)

11月8日～10日、パシフィコ横浜で開催された「第18回図書館総合展」において、広報委員会では、今年も神奈川県図書館協会の展示ブースを開設しました。

昨年に引き続き、神奈川県図書館協会の紹介、加盟館一覧、各委員会の概要と活動報告のパネルのほか、協会刊行物等を展示しました。前面のラックに並べられた加盟館のチラシは、講演会・貴重書展、イベント開催案内が目を引き、多くの方

が手に取っていただきました。

また、昨年まで好評だったブックスタンドの作り方のチラシに変えて、今年は文庫用ブックカバーを作成し、延べ450枚を配布しました。予算の都合上単色となりましたが、薄緑・薄黄色の用紙に、神奈川県の木のいちょう、本、結び目、それぞれのデザインが好評で、特に裏面に印刷した加盟館分布図には、図書館の多さに、みなさんが驚きの声をあげていらっしゃいました。

今年は総合展の来場者が昨年より減っており、その影響からかブース来訪者も3日間で325人と昨年を下回りましたが、熱心に展示をご覧になる方が多く、いろいろな質問をお受けしました。「加盟館の相互協力の体制」「郷土資料のデジタル化」などに加え、最近話題の「読書通帳機の導入」について等。また「神奈川県は活動が盛んと聞いて見に来ました」と他県の図書館の方。「職員が少ない中、大変だと思うが頑張ってください」「公共だけでなく大学と一緒に活動しているのが素晴らしい」等の励ましの声もいただきました。館種を超え、さまざまな人が神奈川県図書館協会の活動に興味を持ち、期待を寄せてくださっていることを実感した3日間でした。



(鶴見大学図書館 吉田 千登世)

研修レポート

「YAサービスの基本と実践 ～学校連携事例をはじめとして～」

(10月20日実施)

10月20日(木)、平成28年度(2016年度)第7回神奈川県図書館協会職員研修会が相模原市の杜のホールはしもにて開催され、相模原市立相模大野図書館・ヤングアダルトサービス研究会代表の清野愛子氏による「やってみよう! YAサービス ～動向と実践例を交えて～」、図書館流通センターの笹原悠氏による「橋本図書館の事例報告 ～発信・交流・挑戦～」の講演が行われました。

清野氏の講演は、①YAを知る、②YA資料を知る、③全国の先進例・事例報告の順で進められました。①は、参加者からの事前アンケートを集約した「YAあるある@あなたの地域」の紹介があり、流行に敏感なYA世代の現状を知ることができました。②は、YA世代と読書について統計数値を基に解説があり、10代は読書離れ世代ではないとのことでした。③は、講師が薦める全国の先進例紹介及び自館における近隣の学校(大学2校、高校1校)との参加体験型プログラムの報告がありました。講演の中で「YAは、図書館『初心者』かつ『すぐ未来の』図書館ユーザーである。手助けや橋渡ししながら、末永い利用者を育てていくことが一番大切である」と述べていました。

次の笹原氏の講演では、橋本図書館は、「YouthfulAge(若い世代)」という造語によりYAサービスを展開しており、発信→交流→挑戦をキーワードに事例報告がありました。まず、第一の場・発信は、自館の掲示板・プチ展示・発行物について説明がありました。第二の場・交流は、中高生編集委員との関わり方や編集会議の様子などについて、第三の場・挑戦は、オリジナル企画の中高生から文芸作品等を募集する「YA大賞」に関する報告がありました。また、中高生の編集委員からの声として「学校以外の交友関係も広げられる」「中高生と本をつなぐ架け橋である」などが寄せられているということでした。

講演後には、相模原市立橋本図書館の館内を2班に分かれて見学させていただき、研修は終了しました。

どちらの講演にも事例報告があり実践的な内容のため、参加者が熱心に聴講されている姿が印象深く、アンケート結果からも「YAサービスの原点を確認できた」「地域の学生同士のつながりを図書館が作っていける面白さを知ることができました」など前向きな御意見をいただきました。

(東海大学附属図書館 岡崎 富美江)

連載：わたしのイチオシ

平塚市中央図書館 『ハイランド』等柿澤篤太郎山岳図書コレクション

柿澤篤太郎山岳図書コレクションは、日本の近代登山の黎明期から戦前までの日本アルプスを中心とした登山に関する図書、雑誌、そして19世紀後半から1930年代までの洋書で構成されているコレクションです。平塚市の戦後復興時の市長であり、横浜山岳会会員であった柿澤篤太郎氏が生前収集された山岳図書をご遺族から平塚市図書館に寄贈されたものです。

コレクションには、日本の近代登山の幕開けを彩った志賀重昂、小島烏水、高頭式、武田久吉、辻村伊助らの図書を中心に、明治から大正にかけての資料があります。

大正から昭和にかけて、夏山登山、雪山登山など登山の方法や技術の進歩した時期であり、大島亮吉、船田三郎、三田幸夫らが活躍しておりました。山岳会、大学山岳部の機関誌・会報などもあります。

今回このコレクションの中から1冊ご紹介します。1887年小田原に生まれ、関東大震災時箱根湯本の自宅で死去した神奈川ゆかりの登山家、辻村伊助の『ハイランド』です。前半は、ハイランド（スコットランド北部山岳地帯）の登山記録でもあり楽しい紀行文でもあります。後半部は、日本の紀行「飛騨山脈の縦走」「高瀬入り」「神河内と常念山脈」と続き、関東大震災で崩壊した自宅から発掘された歌稿103首を合わせた遺稿集となっております。

この柿澤篤太郎山岳図書コレクションには、数多くの名著が収集されており、登山愛好家や研究者にとってたいへん役に立つ貴重な資料と言えます。

(平塚市中央図書館 松澤 文子)

